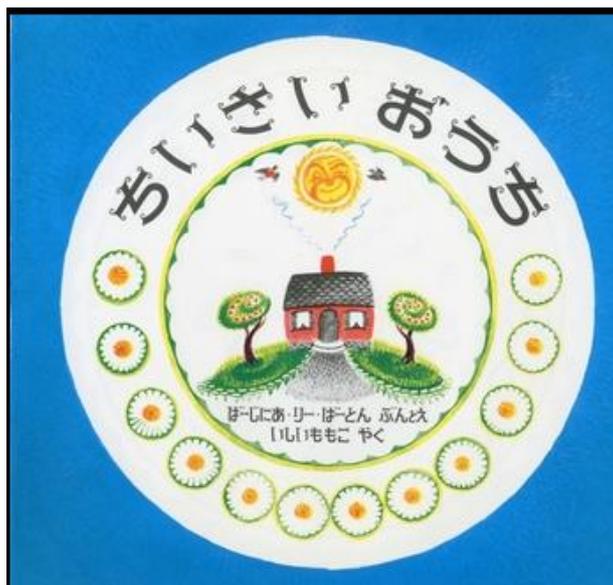


# ～読んでみない？こんな本～

## ちいさいおうち

バージニア・リー・バートン 文・絵 石井桃子訳 岩波書店



ちいさいおうちはひなぎくとりんご畑のある丘に建てられ、夜には星を眺めて暮らしていました。けれどもちいさいおうちの周りは次第に変わっていき、田舎から街になっていきます。ちいさいおうちは住む人もなくなり、ペンキは剥げ落ち、窓枠も壊れたまま。ビルに囲まれ、おひさまも少し見えるだけで、夜の星は全く見えなくなりました。けれどもこの家を建てた人の孫の孫のそのまた孫の人がこの家に気づき、引き取ることとなります…。

お話しのなかで、ちいさいおうちは変わらないのに、周りはずいぶん変わっていきます。ちいさいおうちの周りに道路やビルが建てられる時、工事現場ではこの絵本の作者が他のお話しで書いている主人公が活躍しています。そうやって活躍するものもあれば、追いやられていくものもある場面はなんとも寂しい気分になります。けれども最初にちいさいおうちを建てた人が言った通り、この家はとても丈夫に建てられていたので、年を経てもなお変わらずに住むことができました。最初丈夫に建てられ、きれいに扱われていたちいさいおうちは、今また大切にされ、そこに住む人とずっと幸せに暮らすことなのでしょう。この本は読むたびに、これからも変わらないちいさいおうちの居心地の良さに包まれるような、不思議な魅力を感じる絵本だと思います。